

東京会場

# 民族舞踊を通じた教育実践

7月28日(水) 14:00～15:30

講 師

和光小学校副主事      平野 正美



## (1) 小川早苗さんとの出会いがひきがね

和光小学校という私立の学校で、去年から教頭職をやっています。今日は、アイヌ舞踊と子どもたちということでもって少しお話をしたいと思います。

私がアイヌ古式舞踊と出会ったのは、15、6年前です。2年生を受け持ったときに、アイヌ舞踊と出会ったのです。ちょうど、北海道の古式舞踊の保存会、8団体の調査研究ということで、日本民俗舞踊研究会の須藤武子先生や、北海道教育大学の進藤貴美子先生たちが、8団体をまわって舞踊曲の記録をしたり、歌の記録をしたりしていました。ちょうどそのさなかに、和光小学校を会場にした研究会の中で、須藤先生が修得されてきたいくつかの踊りを私たちに教えてくれることがありました。その時には、静内のものをやっていた時で、静内のチャッピーヤ（雨ツバメの踊り）とイセポリムセ（ウサギの踊り）を教えてくれたんですね。私はそれまで、たくさん日本の民俗舞踊をやってきました。ただ、日本のものは太鼓だとか、笛だとか、鉦（かね）だとか、そのお囃子（はやし）を聞いていれば、それだけでも心がわくわくわくわくしてきて、踊り出しくなるようなものばかりだったんです。けれど、私にとって衝撃だったのは、そういった楽器は一切使わないで、手拍子と歌だけでもって、その踊りの世界が作り出されてしまうという。今まで体験したことのない踊りの世界だったということが一番目の衝撃です。

二番目の衝撃は、ツバメとか、ウサギとか、そんな小さな小動物をいとも簡単に踊りの世界に取り入れてしまうことです。しかも、私がそれまでに経験してきた踊りというのは、一定時間、一定の困難を伴いながら振りを覚えていかなければ自分の体に身につかない、そういったものばかりだったんですけれど、その場に居合わせさえすれば、その手拍子と歌の世界の中でもって、ずっと自分が溶け込めていけるという、こういう踊りの世界があるんだということで、自分にとってはすごく大きな衝撃だったんですね。だからと言ってアイヌ民族のことについて、知っていたかという、自分の小学生時代、中学生時代を振り返ってみても、アイヌ民族のことについては、先生から教わったこともなければ、自分から何か求めて勉強したこともなくて、言ってみれば、アイヌの踊りと出会ったこと、そのものがアイヌとの出会いであったというふうに言ったほうが良いのかもしれないと思います。

ちょうど、そういう時というのは、いろいろな出会いが生まれるもので、たまたまだったんですけれど、北海道札幌市の小川早苗さん（刺しゅう工房主宰）と出会うチャンスがあったんです。ただ、小川さんの刺しゅうの作品をどこで見たかという、小田急百貨店のいわゆる北海道物産展の奥のほうで、えもん掛けにつるされて並んでいる作品を見て、「えー、こんなところに並んじゃっていいのかなあ」というふうに思ったんですね。というのは、それまでにも何度か北海道を旅行してましたけども、そこで見たお土産品として並んでいるものとはちょっと質が違うって言うのかな、そんな感じを受けたんです。こういう刺しゅうの作

品もあるんだってことがわかって、小川早苗さんに自分の方から飛び込んでいって、刺しゅうの話を聞いたり、文様の話を聞いたりしました。その時にたまたま小川隆吉さんも見えていて、「法律」が以前の「法律」でしたから、以前の「法律」を撤廃する、そういう運動のチラシをまかれていたの、そのチラシなどをいただく中でもって、刺しゅうのことに同時に今のアイヌ民族が置かれている現状についてのお話を伺うことが出来たんですね。そんな話を聞いたり、須藤先生に踊りを習っていたということなんかがあったものですから、たまたま自分がそのとき2年生の担任だったということで、これはぜひ2年生の子どもたちと踊ってみたいなというふうに思ったんです。

## (2) 子どもに刺激されて

ただ自分は、料理とか、裁縫とかそういったことが苦手な人間として育ってきて、刺しゅうのやり方について何も知らなかったの、デパートへ行って、売り場の女性に刺しゅうの本とか、糸の選び方とか、布は何を使ったら良いのかということなどを伺って材料を購入して、子どもたちと刺しゅうをやったんです。子どもたちとマトンプシ（鉢巻）を作って、イセポリムセとチャッピーヤを踊ったんです。それが最初の私の実践でした。それをやったときに、同じクラスにいた、長谷川武宏君という子が、夏休みにお母さんと一緒に北海道へ旅行に行ったのです。何の旅行だったかと言うと、アイヌ文化に触れる旅行だったんですね。最初に北海道大学の難波先生のところをお訪ねして、インタビューをしたり、旭川の方でチセノミ（新築祝い）があったので、チセノミにも参加して儀式も体験して来たり、それから小川早苗さんのところにお邪魔して刺しゅうの本当のやり方を教わったり、ちょうどそこに集まっていたおばあちゃんたちから、エルムンコイキ（ねずみ取りの踊り）を教わってきて、帰ってくるんですね。夏休みが明けて、その発表会というときに、模造紙3枚に北海道旅行のことをまとめまして、そのインタビューのテープを聞かせてくれたり、それから、ちょっと僕にはショックだったのは、そのエルムンコイキという「ねずみ取りの踊り」を彼がみんなの前で実演してくれたわけです。スンカイナ、スンカイナという歌で踊るものなんですけど、自分が知らない踊りを子どもにやられたということで、私はえらく傷つきましたね（笑）。それで、すぐ、一週間か二週間後だったと思うんですけど、悔しかったもんですから、「お礼」ということを口実にして、一泊二日でもって北海道へ飛んで、小川さんのところを訪ねたんです（笑）。今のは冗談ですけど、子どもがそういうふうに動いたということが、さらに自分の実践の意欲を高めていったというか、そのときのこうした出会いがなければたぶん、今のようアイヌ舞踊に自分の時間を使っていくことはなかったんじゃないかなというふうに思います。

そんなこんなしている間に、須藤先生たちによる8団体の重要無形文化財への指定の運動が実って、そのお祝いの会が開かれることになりました。それが、札幌の教育文化

## 民族舞踊を通した教育実践

会館で開かれることがわかりまして、日帰りだったんですけどそれを見に行きました。その時に8団体が踊っていく中で、特に自分の気持ち動いたのは、やっぱりそこに子どもが出ていた団体のところでした。その一つは二風谷の子どもたちが、踊りだけではなくて、早口言葉をやってくれ、民族として言葉の問題をどれだけ大事に考えているかということの表われかなというふうに思いました。それから、僕らが「生麦、生米、生卵」っていう、いわゆる語呂合わせ的な早口言葉でやっているのと違って、その早口言葉をちょっと僕は言えないんですけど、早口言葉を全部語り終えると何かその人生の奥深いものが伝わっていくとか、そういう中身を子どもたちが言葉を通して教わっていると言うのか、それがすごいと思ったのです。

それから、最後に出てきたのは、阿寒の子どもたちのクリムセ（弓の舞）とエムシリムセ（剣の舞）だったんです。本物を見るのは初めてだったんですが、教師としての立場からいつも見えますから、そういうことで考えると、やっぱり子どもたちがこうして大事なものを受け継いでいるんだということにすごく衝撃を受けました。真中よりちょっと後ろのほうの席だったものですから、表情までは読み取れなかったんですけど、子どもたちが非常にりりしいっていうのかな、衣装もそうですけれど、踊る姿の中にあるりりしさっていうのか、それを自分の学校の子どもたちにも伝えたいというふうに思いました。ただ、須藤先生から教わったのはツバメとかウサギとかの動物の踊りだったものですから、剣を持って踊るとか、弓を持って踊る踊りがあるのを知らなかったですね。ウサギとかツバメの踊りは、どちらかと言うとやっぱり女の子っぽい踊りかなと一方的に思っていたりしていました。こういう、男の子がやっても本当に飛びついてくるだろうという踊りがあったんですね。

でも、この踊りも歌も、この時には自分で難しいなというふうに思っていたし、動きそのものも、いわゆる日本の民俗舞踊とはちょっと体の使い方が違うから、そこへんはどういうふうにやったら良いのか、これは教材になるかな、出来るかなっていう、そういう見通しは全然ありませんでした。でも、少なくとも、アイヌ舞踊に取り組んでいくだけの値打ちとか、それはあるということ、この公演を見て思いました。初めは札幌までの往復だけで、5万円近くかかっちゃうから、もったいないかなーって思ったりしたんだけど、日帰りでそれだけのお金をかけて行っただけの値打ちはあったものとして帰ってきました。それともう一つ思ったのは、やはり国が無形文化財と指定するのが、あまりにも遅すぎるなということを感じました。こんなに大事なものの、すばらしいものをいつまでもそうやってほっておいたら、教師だって自分から探していかなければ出会うこともないだろうと思うんです。

### (3) アイヌ舞踊の魅力

とにかくすごいな、やりたいなというふうに思いながら少しずついろんな踊りと出会っていったわけですね。

ど、その「アイヌ舞踊の魅力」ということについて、自分で踊る中でああ、そう言うことだったんだなあというふうにわからせてくれたのが小林正佳先生（天理大学教授）でした。ちょうどその8団体の指定で仕事されていた小林先生が、アイヌ舞踊を私はこういうふうに捉えるということ、『北海道アイヌ古式舞踊』（北海道アイヌ古式舞踊連合会発行）で、こんな風に述べられているんですね。

「その点わたしは、歴史的な古層ではなしに、時代を超えて人間ひとりひとりの中にある体験の古層、感性の古層にこそそれはつながりがあるのだと考えている。子どもの感性と、言葉とか理性とかによって覆われたその感性のあり方を比較することがいつでも適切とは限らないけれど、普段のわたしたちは、子どもなら知っているようなからだ全体を動員しての深い感性の基底になかなか気がつかない。」子どもを子どもとして見てみると、どこかで間違っているというふうに思うのはこのところなんですね。大人のほうが何か立派なように思ってしまうけれど、子どもの方が感性の面ではこういったその踊りの世界の魅力をきっちり捉えるというのか、人間はだんだん大人になっていく中で余分なものを体のあちこちに身につけながら大きくなっていっちゃいますから、何か一見複雑なものが非常に値打ちがあるような錯覚に陥りやすいんです。ツバメになって踊るとかウサギになって踊る、その楽しさを子どものほうがよく知っているということなんだろうなというふうに思うんです。

「しかしなおそれは、時代の推移や人間個々の成長過程のどこかにおき忘れられたというようにではなく、常に、生きる人間の内側深くに閉じ込められてあるはずで、おそらくそうした核心を、一見単純な動きが一層直接的に揺さぶり起こすのだろう。」手拍子と歌、そして輪を作って踊る、その中に自分がただありさえすれば、だんだんだんだん、眠っていたものが呼び起こされていくというのか、そういったことは須藤先生の話の聞いたり、須藤先生と一緒に踊る中で自分自身が感じていたことだったので、非常に小林先生の言葉というのは自分の体を通してよくわかったんですね。

「改めて強調しておかなければならないと思うのだけれど、単純な動きすなわち簡単な動きではまったくない。」非常に、そこのところを間違いないんですけど、単純さ、その奥にある無限大の深さって書いてあるんですけど、単純だから簡単ということではないなということは、すごく自分でも思います。

「思い切りからだを投げ出すだけ、腰をかがめて歩くだけ、そのことが、誰にでも容易にできると思うのは大間違い。試しに動いてみると一目瞭然で、からだを投げ出すということの何と容易でないことだろう。腰をかがめて歩いている人それぞれの足どりの、何と違っていることだろう。たったそれだけで見る者をとらえて離さない魅力ある動きも、形をたどるだけのうわついた動作も、上べの形はなるほど似通っているかもしれない。しかしなお、一体これでも舞踊と呼ばれ得るのかとさえ思われる単純明快さが、その単純明快さ故に、一気に、踊る人間それぞれの動きの

核心を顕にしてしまう。不必要な部分をそぎ落としてしまったかのような鋭さで、踊る者それぞれのからだのありようをさらけ出させてしまう。さまざまな装飾がないというその分だけ、踊り手は、じかに自分自身のからだのありように直面させられる。」じかに自分のからだのありように直面させられるという、そこらへんに対する抵抗があるから、大人はこういう単純な動きの世界になかなか入れない。子どもはそういう飾りがいいから、自分が他人からどう見られていようと、自分が踊っているバツタがどうなのか、キツネがどうなのかというその形ではなくて、踊っている自分に喜びがあれば、もうそれで良いことです。小さければ小さいほどアイヌの踊りというのは子どもたちに喜ばれるということなのかなと思います。

「そしてそれは、心のありようとも無縁ではない。肉体的な、あるいは心理的な、ほんの僅かのこだわりや抵抗感でさえ、わたしたちのからだを直接押しとどめてしまうだろう。からだに浸みついたさまざまなしがらみを払い落としてこそ、そうした動きに入りこむことが可能になる。単純な動作に自らを投げ出すということは、からだを解き放ち、自由になることと結びついている。その自由さこそが、わたしたちをとらえて突き動かす。」そう言う意味で私が好きなのは、いわゆる自由踊りっていうのかな、輪になって、本当に自分が好きな振りでもって踊る、あれがやっぱり一番好きですね。形ではなくて、その場のそこで出会った人と自分の好きなように踊る、その自由というところがすごく好きなんです。そういったものがあるということが、やっぱりアイヌ舞踊の一番大切なところなのかなというふうに思います。

#### (4) 4回の「ウテカンパアンロー」公演のこと

そんな出会いがあった後、やはり、人との出会いがたくさんありました。レジュメの「今を生きるアイヌ民族と共同して創る」というところに入りますけれども、そこは、三つのことだけを取り上げました。一つ目は、4回にわたる「ウテカンパアンロー」公演です。1991年から1993年の本当に短い間だったんですけど、北海道新聞社の道新ホールというところで、5月に「ウテカンパアンロー」の第一回公演を行いました。これはどういうことなのかというと、群馬の詩人・木村次郎という人と、そのパートナーの作曲家・丸山亜季という人がいまして、もう30年、40年くらい前に「オキクルミと悪魔」という、ユーカラを素材にした音楽劇を作っているんですね。作曲されたその歌が保育や教育、授業の中で、日本全国の保育園、小学校、中学校、高等学校で、ずっと歌われているのです。ただ、丸山亜季さんは、NHKが作曲したフィルムをただ一つの手がかりにして作ったので、実際のアイヌ民族が踊っている、踊りだとか歌だとかというものと、直接の出会いがある中で作ったものではなかったんですね。だから、アイヌ民族のその精神性とかその文化を歌の中で歌うということについては、なされていたと思うんだけど、直接的なアイヌとの出会いの中でさらに、曲そのものが深まっていくという

のか、そういう機会がなかったのです。

1990年に、北海道で民俗舞踊教育をやっている札幌の仲間たちと、積丹半島のほうにソーラン節の取材に行ったんです。そのソーラン節の取材の中での話なのですが、鯉御殿が作られていく過程の中でアイヌの人々が下働きをさせられていたという問題なんかについては、その積丹の教育委員会の人が口を濁しながらでしたけれども、きちんと語っていました。そんなことも含めて、ソーラン節の取材をしていく中で、北海道の仲間たちと、ぜひ北海道でもって「オキクルミと悪魔」の公演をやらないかという話が急速に持ち上がりまして、北海道新聞社で第一回の公演をすることになったわけです。アイヌ語で「ウテカンパアンロー」とついているこの公演の題は、亡くなった白沢ナベフチ(嬬)がつけてくれました。「心をつなごう、手をつなごう」、和人とアイヌが心と手をつなぎ合いながら、これからの世の中を作っていこうという、そういう意味でもってナベフチがつけてくれた題なんです。それは1991年から1993年まで、北海道、群馬、埼玉、沖縄というふうに4回行いました。

この過程の中でのことですが、埼玉で行ったときには、横山孝雄さんの『銀のしずく』の絵本がちょうど出たときだったんです。その絵本をスライドに作り変えて、それを関東ウタリ会の人たちに語ってもらいながら、それを見るということも間に入れてやりました。それから沖縄では、たくさんアイヌの人たちが直接公演に関わってくれたり、沖縄まで足を運んでくれました。1993年12月の暮でした。10月に白沢ナベフチが亡くなってしまっていて、亡くなって2ヶ月後の沖縄だったんです。中本ムツ子さんが遺影を胸に抱えて沖縄まで来てくださったたり、会場で北原龍三さんの写真展を合わせて行いました。さらに、二風谷の貝澤吉哉さんがヌササンを是非舞台にということで、自分で作って舞台の上でそれを組み立てて、公演の前にカムイノミをしてから舞台を始めるということをしてくださったたり、小川早苗さんや二風谷の方たちからは、貴重な衣装を沢山お借りしたりしました。それからこのときには、北原次郎太さんとか、小川基さんとか若い人たちが一緒に舞台上がってくれて、一緒に踊ったんですね。合唱隊とか舞台上がった人を合わせると、大体400人位の人たちが手弁当でもって集まってくれました。これだけの衣装をつけることだけでも大変な作業だったんですけど、一つのものをみんなで一緒に心を合わせて作っていこうという、情熱と言うのかな、それが見事に結集したかなというふうに思うんです。このときには、帯広の方からアイヌ舞踊を一貫して指導してくれた広尾正さんはもちろんのこと、他にも上野サダさんたちがウポポ(歌)で応援しようってことで駆けつけてくれました。

もう、この頃はすでに、バツタの踊りなども教材として、全国の子どもたちに踊られるようになっていました。今も沖縄の方でも年に一回ですけど、アイヌ舞踊の講習会も行われて、沖縄の子どもたちもアイヌ舞踊に親しむようになっています。私も、このバツタの踊りに初めて出会った時には、何ておかしな踊りなんだろうというふうに思ってい

## 民族舞踊を通じた教育実践

ました。こういうものを学校でやっていいのかなっていうふうに、正直言って思ったこともあるんです。でも、教師が先頭になって踊り始めると、子どもたちはぐちゃっと集まってきて、一緒にバッタになって踊るんです。こういうものを踊りにしてしまう人たちってすごいなというふうに思います。このときの取り組みは、さほど注目されたわけではなかったんですけど、今から振り返ってみると、中身的にも運動的にも非常に大きな意義のあった、教育運動の中でも歴史に残る取り組みだったんじゃないかなっていうふうに自分では思っているんです。

### (5) 関東ウタリ会との共同の取り組み 「アイヌラマチ」公演で学んだこと

また私たちは、関東ウタリ会の人たちとの共同の取り組みということで、「アイヌラマチ」公演も行いました。私たちは踊りや文化ということだけでやっていくのではなくて、やはり今生きているアイヌ民族の置かれている問題にも、直接関わりながら考えていかなければならないという、そういう面がどうしてもあるっていうふうに思うんです。ですから、私は最初に小川早苗さんと会ったときにも、刺しゅうの素晴らしさについて教えてくれただけだったんですけども、小川隆吉さんがそのかたわらでもって配られていた一枚のチラシの持っていた意義というものを常に考えながらやってきていたんじゃないかなと自分では思っているんです。そんなことを強烈に教えてくれたのが、関東ウタリ会とやった「アイヌラマチ」公演でした。その中で、北原きよ子さんが、最初の出のところで語られているんですけど、その語られている言葉がやはりこれからも常に大事なことなのではないかなというふうに思うんです。

ともすると教員というのは、文化なら文化だけとか、教育なら教育だけをくくりとってやっていれば良いみたいになりやすいんですけども、関東ウタリ会の姿勢は違います。文化の問題をやっていくと同時に、自分たちの政治的な問題や行政的な問題をきっちり、どこかでしっかり押さえながら考えているというその姿勢には、やっぱり学ばなければならぬということ、私は「アイヌラマチ」公演でもって思いました。文化や教育というのは、社会の中の一部なのだから…。いろいろありましたけれども、やっぱり自分にとっては一緒にやるのが出来て良かったなと思った公演でした。

### (6) 「沖縄戦とアイヌ民族」を学ぶ

それともう一つ、6年生の担任になって沖縄の学習をするときに、沖縄戦とアイヌ民族という問題に取り組んだのです。それはやはり関東ウタリ会のほうで活動されている鷺谷サトさんのいとこにあたられるのでしょうか、弟子豊治（てし とよじ）さんという方が沖縄戦で亡くなっているんです。つまり、「南北の塔」に関わりがあるんですね。沖縄戦のことについては私もずっと和光小学校でやっていまして、北海道から約1万人の兵隊が沖縄に動員されてい

て、沖縄戦にも多数引っ張られていったんですね。その中には当然、アイヌ民族もいたわけで、その中の一人が弟子豊治さんだったということです。ニュース番組の中で、この南北の塔について次のように解説されています。

(ビデオ)

沖縄県糸満市、真栄平地区、太平洋戦争で唯一の国内戦となった沖縄戦には、北海道から出征した兵士も数多く戦闘に参加しました。ここに、北海道出身のアイヌの兵士が建てた慰霊碑があります。悲惨を極めた沖縄戦は、この慰霊碑に今も刻みこまれています。

太平洋戦争で唯一の国内戦となった沖縄戦が終わったのが47年前の今日です。

そしてこの沖縄戦にはアイヌ兵士も参加しており、沖縄県真栄平地区には慰霊碑もあります。アイヌ兵士と沖縄の人たちの戦後を取材しました。

弟子屈町、屈斜路湖、アイヌの兵士、弟子豊治さんは昭和19年に、屈斜路湖畔のコタンから出征しました。激戦を生きぬいた弟子さんも、今は養護老人ホームで寝たきりの生活を送っています。

昭和20年4月1日に始まった沖縄戦。日本軍は圧倒的にまさるアメリカ軍に、むなしい突撃を繰り返しました。戦いはおよそ3ヶ月にわたり、軍人や沖縄の住民、合わせて20万人の犠牲者を出しました。日本軍はこのとき、アメリカ軍ばかりではなく、住民たちにも襲いかかりました。弟子さんが思い出すのも、そんな思い出ばかりです。

日本が戦後の高度成長期を迎えた昭和39年、一度故郷に戻った弟子さんが、アイヌ文化使節団として再び沖縄を訪れます。そして、弟のようにかわいがっていた仲吉さんの住む真栄平の村を再び訪れます。

一緒に戦って散っていったアイヌ兵士たちや、戦争で犠牲になった住民の霊をなぐさめたいという弟子さんの願いは実現しました。この慰霊碑は、沖縄の人と北海道の人が一緒に眠っていることから、「南北の塔」と呼ばれることになりました。戦争が終わって47年（当時）、沖縄から戦争の傷跡がなくなったわけではありません。

国の同化政策の中で、激しい差別を受けながらも、お国のためと戦争で死んでいったアイヌ兵士たち。そして敵だけではなく、日本兵にも虐殺された沖縄の住民。「南北の塔」には戦争の英霊だけではなく、むなしく死んでいった人たちの叫びが刻み込まれています。

47年前（当時）ですから、5、6年前の放送なんですけど、その弟子さんも亡くなられました。私は「南北の塔」を子どもたちと学びたいと思ったものですから、弟子さんの入院されている弟子屈の養護老人ホームへお見舞いに行っただけですね。このテレビの中では弟子さんの言葉が若干聞き取れましたけれど、私が行ったときには、すでに何をおっしゃられているのかよくわからない状態だったのです。私は沖縄の太鼓を持って、「これ沖縄の太鼓ですよ」と言ってお見舞いだけして帰って来ました。それから何ヶ月かして、亡くなったということを知りました。そして、更に「南北の塔」をもう少し身近に学習しようということで、関東ウタリ会の鷺谷サトさんに学校に来ていただいて、「南北の塔」を深める学習をしました。その時のニュース番組は、こういう解説で始まります。

（ビデオ）

先ほどお伝えした二風谷ダムの建設問題ではアイヌ民族の歴史や文化をどう判断するかが問われていますけれども、東京のある小学校ではアイヌ民族の問題を授業で取り上げています。この授業に北海道のアイヌの女性が招かれ、民族の歴史と差別体験を子どもたちに語りました。

（鷺谷）本当に人間扱いされなかったんです。道を歩くとアイヌの子と追いかけてきて、石をぶつけて、棒切れ持ってきて追いかけて叩いて…人間がそんなことをされると思えないでしょ、皆さんね。でも、アイヌの子どもってそうやって生きてきました。

東京都世田谷にある私立和光小学校では、6年生は修学旅行の代わりに沖縄で学習旅行を行います。この学習旅行で子どもたちは戦争を体験した現地の人々に触れあい、沖縄戦の悲劇を直接感じ取り、戦争について、そして沖縄が本土から差別されてきた歴史について自主的に研究することになっています。また学校は、民族文化の学習の中で、皇民科教育を受け、沖縄戦で死んでいったアイヌ兵士の事を知り、6年生は授業の中で、アイヌ民族の沖縄と共通する差別を受けてきた歴史などについても考えることになりました。

（平野）事実そのものが、教えられていないって言うか、アイヌがいるということ自身も教えられていないし、アイヌって言われて、アイヌって何なのかって、アイヌという言葉自身を知らない人もいっぱいいるんじゃないかと思うんですよ。

和光小学校では、今回のアイヌ民族の学習では、教師が資料の説明をするだけでなく、子どもたちが直接アイヌの人会い、歴史や文化、そして差別

問題に関する実体験を聞くことができるよう、神奈川県に住むアイヌの鷺谷サトさんを招くことになりました。鷺谷さんは北海道浦河町出身で、沖縄県で4つ年上のいとこをなくしています。

（鷺谷）私たちのアイヌって言葉は人間（という意味）だよ。私たち、どこ悪いの。何が悪いの。私たちの先祖から、草も木も魚も動物もみんな一緒に生きるのだ、草も木も小さな動物も生きられるようであれば、人間もちゃんと平和に暮らせないんだと、アイヌはこう思ってすべてを大切にしました。その大切に生きてきたアイヌのどこが悪いのって、私たち必死になって叫んでも、なかなか認めてもらえない。

現在のアイヌ民族に関する教育の大きな問題点は、アイヌの歴史や文化について十分に説明している教科書がないということ、そして、アイヌ民族に関して、子どもたちに正しく教える人間がいなかったことにあります。しかし、今回の和光小学校の試みは、不十分な教育の体制の中で、アイヌ民族の本当の声が、教科書の活字や先生の言葉以上に、民族問題を子どもたちに伝えることができる可能性を示しました。

今の日本の教育の中では、やっぱり欠けているものっていろいろあると思います。これは和光小学校だけの今回の取り組みでしただけでも、和光小学校では今後もこうした形で、アイヌ民族の文化や歴史について子どもたちに学んでもらいたいと話していました。

子どもたちと沖縄を学ぶときには、やはりアイヌ民族の問題についても一緒に学んでいかなければならないのではないかと考えて、「南北の塔」に取り組んできているわけです。こういった差別の問題や政治がらみの問題ってというのは、なかなか子どもたちと取り上げにくいところがあるんですけども、やはり教師の頭の中にはそういったことが常になければいけないのではないかなというふうにも思っています。

## （7）アイヌの踊りの全国的な広がり

次に進みます。「オキクルミと悪魔」を通してのアイヌ舞踊の全国的な広がりです。4回にわたる「ウテカンパアンロー」公演をやったということが、その後そこに参加した教師や保母たちを中心にして、それこそ先ほど言ったように沖縄の保育所や小学校でもアイヌ舞踊を取り上げられるようになったりしているところに現れているように、日本全国で踊られるようになってきています。その点では、広尾正さんの果たしている役割が大きいのです。和光小学

## 民族舞踊を通じた教育実践

校ではすでに、15、6年前から始めていて、今、小学校1年生の秋の生活勉強の単元で、アイヌ文化を学ぶという単元を作ってやっています。秋になると1年生がアイヌ料理を作ったり、絵本を読みかせてもらったり、動物の勉強をしたり、刺しゅうをしたりする中で、いくつかの踊りを踊るんです。毎年、そこに取り組む子どもたちから素敵な子どもたちの姿や、そこに関わったお父さんお母さんたちの姿が見られるんですね。特に障害をもった子どもたちが、アイヌ舞踊の中でとても生き生きするっていうのか、それはなぜなのかなあと、とても不思議に思っています。(ビデオ上映)

橋渡りの踊りですね。これは3年前の秋のお祭りなんですけど、実はこのダウン症のA子ちゃんっていう子が、この時の取り組みの中でもって非常に大きな変化をしたんですね。このビデオは美術の落合先生が撮っていて、彼の役割は全体をまんべんなくビデオに撮るということだったんですけど、A子ちゃんが10分足らずのこの発表の中で見せる姿がとっても生き生きしてたので、おのずとカメラがA子ちゃんだけを映していくのがわかるんです。普段、A子ちゃんは体育の授業はやりません。参加しないけど、踊りの、このときだけは出てきてやるんです。そして、このときびっくりしたのは、こうして歌っているんですね。ずっと小人数の幼稚園で育ってきた子だったために、和光小学校はエネルギーにあふれた子どもたちが多いものだから、なかなか自分の場所が見出せなかったのです。お母さん自身も、このままでは困ったなああってずっと暗い顔をしてたんですけど、このお祭りのアイヌの踊りに取り組んでいるときのA子ちゃんを見る中でもって、だんだんだんだん自分の中にあったこだわりが氷解していきました。

A子ちゃんは、ほとんどしゃべることなんかなかったんですけど、こうして踊りの歌も自分が歌えるところはちゃんと歌っています。バッタの踊りになったときに、A子ちゃんはこちらの方で踊ってたんだけど、ずーっと前へ出てきて、一番前で踊ってるんですね。それでどうしてなのかって見てみると、すぐこの所にお父さんとお母さんが見に来ていて、自分が踊っているのを一生懸命見せているんですよ。そして、A子ちゃんと仲の良い男の子が「A子ちゃんそっちじゃないよ、こっちへおいで」と呼びに来たんだけど、絶対言うこと聞かなくて、ここでもって一生懸命踊ってるわけです。それでしょうがないんで、彼もここで一緒になって踊っているわけです。歌も動きもその通りではないんだけど、踊りの振りを覚えたりすることは、この子には出来ないことなんです。でも、そういうこととは関係なく、自分はその歌と手拍子の中でもって自分を思いっきり出せるっていうか、そこに非常に大きな魅力があり、そういう点では障害を持つ子どもだからこそ、何かそういうことが、もっと直接的に伝わるのじゃないかと思うんですね。弓の踊りも、二週間位の練習での取り組みなので十分やれず、ちょっと簡略化してやっています。これもやっぱり子どもたちが好きな踊りです。

先ほど、毎年いろんな姿が見られるという話をしました。もう一人情緒障害のY子ちゃんという子がいるんですけど、

やっぱり入学してから非常に落ち着きがなくて、友だちとトラブルがあると常に手が出る、足が出る、ひっかくは、物は倒すはという、そういう子がいたんです。担任の入沢先生もなかなかその子と心を通わすときがなくて、大変つらいときを過ごしていたんですけど、お祭りの時に「子鶴の踊り」という踊りに取り組んだんです。生徒が子鶴になって入沢先生が親鶴になって、肩をたたきながら子鶴に向かってこれから飛び方を教えるからしっかり覚えるんだよってということで、顔と顔を見合わせる場所から始まります。その時に教師のほうとしては、子鶴が親鶴から学びながら飛んでいくんだから、しっかり親鶴の目と目を見合わせるんだよという話をしたんです。そしたら、そのY子ちゃんが子鶴になっているときに、入沢先生の顔をじーっと見るのです。そうすると入沢先生は、言葉では言ったものの、そこまでじーっと見るというふうには言わなかったものだから、その視線に耐えられそうもない。でも、そこで負けちゃいけないと思って逆に、いいかい、今から先生と一緒に踊るんだよと本気で見つめ返して目と目が合ったときに、1年生のときからつらい思いをしていたんだけど、初めて彼女と気持ちが通じ合えた瞬間が作れた子鶴の踊りでもってそういう瞬間が作れたと言って大変喜んでいました。つまり、踊りというのは、そういう力を持っているのかなと思うんです。こういう包み隠さずに自分を出せてしまう要素がアイヌ舞踊の中にあって、小さな子ほどそういう世界にずっと入っていけるといえるところが大きな魅力であり、私も含めて和光小学校でずっと教材にし続けていることの理由なのかなっていうふうに思っています。

### (8) 足もとから学びの場を

今沖縄がすごくブームになっていて、運動会なんかでも、エーサーが取り上げられたり、総合的な学習の時間っていうことでもって、沖縄のことを学びながらエーサーを踊るというようなことが盛んにやられているのです。私は、それと同じようにアイヌ文化についても、アイヌ民族の歴史についても、それから今置かれている政治的な状況についても子どもたちと共に学んでいかなければいけないことなのではないかなっていうふうにすごく思っています。それをもっと、自分が毎日働いているその職場のレベルでもって、やっていくことが求められているのではないだろうかということをもっと思っていたのです。北海道へは何度も行っているんですけど、一か所に数日間滞在してじっくりと学んだということがあまりなかったので、去年の8月に職場の仲間4人と北海道へ一緒に行ったわけです。去年は白老のほうへ行きました。白老には、自分の中には何か偏見があって、「観光アイヌ」というか、そういうとらわれた見方が自分の中にずっとあり、なかなか足が向かなかったんですけど、行ってみて白老の中にはきっちりやっている人たちがいる、私の方がまちがっていたということがわかって、そういう人たちとの出会いを大事にしたいなと感じました。

その旅行がきっかけになって職場の中に「和光アイヌ文

化研究会」という会員10人位のちっちゃな会を作ったんです。ちゃんと機関誌も出そうねと言って、今4号まで機関誌を出したりしながらやり始めました。職場でコツコツやっていくことが必要になって思ったりしています。

この時の旅では、千歳にも行きました。昨年まで佐々木博司先生がいらしゃった千歳市立末広小学校には、学校の中にチセ（家）があるんですね。屋内にチセがあるのは、日本では国立民族学博物館と北海道開拓記念館とその末広小学校の3つだけらしいんですけど、空き教室に立派なアイヌチセがあります。細かいところまで全部指導を受けながら、本物の材料でもって普通に作り上げたそうです。サケ漁の学習なんかも、文部省指定の研究なんかだと、ぬいぐるみみたいなサケを作って、そのサケを殺す格好だけやってお茶をにごす。それじゃあまずいんじゃないかということで、千歳川からサケをつかまえてきて、それをたた

いて殺して、それをさばいて食べるという、まさに生き物の命をいただいて生きている人間と自然の生き物との関係ということをやらない限りは、アイヌ文化を勉強したことにならないんじゃないかっていうことで、3年生でやっているそうです。そして1年生から6年生まで、しっかりカリキュラムを持ちながらやっている末広小学校で、その中心だった佐々木博司先生を8月29日に東京にお招きして、勉強会をやっていこうかなということも企画したりしています。

いずれにしても、大きく広がっていくことはなかなかないのかも知れないけれども、点でもいいから、コツコツと訴え続け、やり続けていくことが大事なのかなということを思っているんです。これでお役にたったかどうか分かりませんが、聞いてくださってありがとうございました。



和光小学校2年生（間宮学級）